

2022年度

修士学位請求論文要旨

武術・武道における「小太刀」に関する研究
—日本剣道形への「小太刀の形」採用の背景を探る—

明治大学大学院 国際日本学研究科
国際日本学専攻 文化・思想研究領域

学生番号：4911216001

氏名：中山 竜一

〈研究の背景及び動機〉

日本の中世から近世にかけて、工夫・研鑽されてきた脇差・短刀等を用いる、通称「小太刀」は、明治維新以降も武術・剣術の世界において伝承されることとなった。1912年(大正元年)には「小太刀の形」三本を含む「大日本帝国剣道形(以下、帝国剣道形)」が制定され、現在もなお「日本剣道形」として修練されている。また、全日本剣道連盟は、これを昇段審査(四段以上)の一科目としており、高段位をめざす剣道修練者にとっては必修のものとなっている。

しかし、この形に関しては、剣道の国際的発展に伴って問題が生じている。まず、外国人剣道修練者については、互いに剣道具(防具)を着用し竹刀で打ち合う稽古及び試合(以下、竹刀稽古)だけでなく、武士文化への関心から「日本剣道形」への取り組みも熱心な人が多い。特に、ヨーロッパを中心とする海外の剣道修練者は、竹刀稽古の前に必ずその形の稽古も行うことが多いということである。その一方で、日本人剣道修練者については、競技における勝利至上主義の背景から竹刀稽古のみに偏重してしまい、昇段審査前にその形を付け焼刃的に稽古をするという傾向が生じている。

したがって、外国人剣道修練者が抱く形への関心に応えるためにも、あるいは日本人剣道修練者が形の意義を再確認するためにも、現在まで伝承されてきた形に含まれる技法(刀や身体操作法)とそれに伴う心得や、その修練の意義に関する研究は、さらに進められるべきである。

「小太刀」に関する先行研究においては、資料として紹介した論文・発表等や、論考の一部として取り上げたものがこれまでにいくつかあるが、「小太刀」のみに焦点をあてた論考は、管見する限り見当たらない。殊に「帝国剣道形」における「小太刀の形」の研究は未開拓の部分が多い分野であるため、これを明らかにし、国内外に発信することは意義あるものと考えられる。

〈研究目的〉

上記した問題を解決するための一助となるよう、本研究では、武術・武道史の観点から「小太刀」に焦点をあて、伝承されてきた技法及び心得を整理し、その修練の意義を明らかにすることを目的とした。

本研究により「小太刀」の技法及び心得と、その修練の意義について考察を深めることは、近代剣道の大家たちが、どのような想いで日本剣道形における「小太刀の形」を後世に伝えようとしたのか、それを明らかにするための一つの手がかりになると考えられる。

〈「小太刀」の定義と考察範囲〉

本研究では、様々な文献の記述を考慮した上で、武術・武道における「小太刀」を「刃

長が二尺(約 60.6 センチメートル)未満の脇差等を用いる武術」と定義した。

また、文献によっては、「小太刀」の技法及び心得を説明する際に、その取り扱う武器を「短刀」や「短剣」などという用語で表記している場合もあったため、「小太刀」において用いられる武器(小太刀・脇差・短刀・短剣)の名称を「小刀」に統一した。

加えて、本研究では、後に示す研究課題を解明するための便宜上、その「小刀」よりも長い武器(太刀・鎌・薙刀など)を用いる相手を制する場合のものに、考察範囲を限ることとした。

〈研究課題〉

本研究では、以下の通り研究課題を設定し、第一章から第六章に分けて考察を試みた。

中世から近世にかけて、各武術流派で工夫・研鑽され、連綿と受け継がれてきた「小太刀」の技法及びそれに伴う心得を整理し、帝国剣道形に如何なるものが受け継がれたのかについて考察する。また、明治維新以降、互いに全長三尺八寸(約 115 センチメートル)程の竹刀で打ち合う「竹刀稽古」が主流となっていく近代剣道の形成過程において、「帝国剣道形」が制定される際、なぜ「小太刀の形」も採用されることとなったのか、その理由について考察する。

〈結論〉

第一章から第六章まで、各章の考察結果をまとめると以下の通りである。

- 【一】日本古武道協会に剣術流派として加盟している全 22 流派を調査した結果、その内の 15 流派が「小太刀」の形を有していると確認できた。さらに、その中から代表的な 3 流派を取り上げて、「小太刀」の形を観察し、その技法を整理した結果、小刀の有利な近間まで「入身」し勝ちを制するという原理・原則があることが分かった。
- 【二】高野佐三郎や笹森順造が修めた一刀流における「小太刀」の心得を見ると、「入身→長短一味→無刀の心」という修行階梯があると考えられ、それが帝国剣道形にも受け継がれた可能性があるかと推察できた。また、帝国剣道形における「小太刀の形」からは、「平法」の思想が根底にあると窺われ、「無刀の心(得)」や技法の特徴が、「平和」を想起させたために、その思想と繋がったのではないかと考察した。加えて、「小太刀」の心得が、近代剣道(撃剣)における「竹刀の長短論」にも影響を与えた可能性があるかと確認できた。
- 【三】日露戦争後、陸軍による「両手軍刀術」の教育体制整備を契機に、当時の剣道界は陸軍との関係を深めた。その事実を手掛かりに、剣道界側の動向をみると、剣道を精神的側面及び実戦的側面においても戦争に活用できるようにしようとする意図が見て取れた。それらを踏まえて、剣道界側が白兵戦闘の実態を改めて把握したもの

と考え、高野佐三郎(剣道形調査委員会主査)を中心に「小太刀」の修練の必要性が再認識された結果、帝国剣道形に「小太刀の形」も採用されるに至ったのではないかと、仮説を提示した。

- 【四】帝国剣道形における「小太刀の形」の技法を整理した結果、「小野派一刀流剣術」にある技法と類似する点が三つ確認でき、高野佐三郎が修めてきた「一刀流中西派」の「小太刀」の技法がベースになっているのではないかと推察できた。
- 【五】実際の戦闘の場(実戦)を想定して考案された、「小太刀」の形、そしてその技法とは如何なるものなのか、隈元實道の『武道教範』に記述されている形(振氣流練體柔術第五段之形)を取り上げ考察した結果、剣術と柔術の複合武術であるということが顕著に見て取れた。また、正面への斬り込みに対し、「受け流し」で反撃をするといった技法は見て取れず、高野の弟子である林田敏貞の主張(「受け流し」の技法は、大変難しく「実地」(実戦の場)で行われることは非常に少ないという主張)と一致した。
- 【六】高野佐三郎が、帝国剣道形の補助教材という目的で考案した「東京高師五行之形」による「小太刀」の形を取り上げ、高野が当時及び後世に伝えたかった「小太刀」とは如何なるものであったのか考察した結果、帝国剣道形同様に「受け流し」といった高度な技法を残しつつも、単純かつ典型的な「入身」の技法や、柔術的な技法が付け加えられており、今後の戦争への実戦的側面における剣道の活用を意図しているように見て取れた。

以上が、本研究における考察結果である。「小太刀」に関して言及されている文献・資料は比較的少なく、得られる情報も限られたが、中世・近世において工夫・研鑽されてきた「小太刀」が、近現代の撃剣・剣道にも影響を与えたことが、確かに窺われた。しかし、帝国剣道形に、そもそもなぜ「小太刀の形」も採用されることとなったのか、その疑問に対して明確に答えている文献・資料を見つけることはできず、主に当時の時代背景及び剣道家の言説をもとに推察するに留まった。よって、今後もその解明を研究課題の中心に据え、調査・探求を続けていきたいと思う。